

日本の動物愛護について  
～他国との比較から見える問題点とは～

国際政策文化学科 3年 東中川沙紀

### 1. 概要と研究目的

日本において犬猫の殺処分数は年々減っているものの、未だに 3 万頭以上が殺処分されている。しかし、動物愛護先進国のドイツでは基本的に殺処分は行われない。では、なぜ日本では人間の命と動物の命が平等なものとして扱われていないのか、制度的な課題と国民一人ひとりの意識の問題に焦点を当てて考える。また、海外の動物愛護先進国において、殺処分ゼロを実現できている要因はどこにあるのかを調査する。他国で殺処分ゼロを実現できているならば、日本でも実現不可能ではないと考えられる。以上のことから、本プロジェクトの目的は、他国と比較した上で日本の動物愛護における問題点を見つけ、海外の事例を参考として殺処分ゼロの実現に向けた提言に繋げることだ。

### 2. 活動内容

研究では主に、①日本の殺処分数変遷の調査、②若者 145 名への動物愛護の意識に関するアンケート調査、③文献調査を通じた海外の動物愛護先進国と日本との比較、④動物愛護団体である NPO 法人にやいどは一とでの実地調査と代表へのインタビューを行った。以上のことを踏まえた上で、人々に動物愛護を社会問題の一つとして認識し興味を持ってもらうため、SNS をはじめとしたメディアを通じ発信することの有効性を提言する。

### 3. 結論

日本で人間の命と動物の命が平等なものとして扱われていないことには、制度的な課題と国民一人ひとりの意識の問題があると考えられる。まず、法制度の問題に関しては、ドイツでは「動物はモノではない」と法律で明記されているのに対し、日本では動物はあくまでも所有物として定義されていることがある。それにより、すぐに救助が必要な動物を助けられない事態となっているため、法の見直しも急務だと思われる。一人ひとりが関心を持つことが、政治を動かす力にもなるはずだ。次に、国民の意識の問題としては、日本では動物は愛でる対象であって、社会問題として捉えられるものではないことが判明した。それゆえ、殺処分問題に関心があったとしても、制度的側面ではなく、「かわ

いそう」という感情的側面が強くなってしまっている現状がある。動物愛護先進国のドイツでは、幼い頃から動物愛護に触れる機会に富んでいるため、日本でも教育に導入していく必要があると考えられる。日本において殺処分ゼロを実現するには、動物を人間と平等に扱う法制度と、幼少期から動物愛護を学び国民が知識をつけることが重要だ。